

# 夏の香

キミイ

太平は良い場所を見つけた。

そこは丁度午後三時から四時の間は木々で木陰になり、良い具合に風通しも良く、休憩中に昼寝するにはぴったりのベンチだった。

太平は昼時のサウナのような厨房から解放され、たった一時間だけの休憩をそこで過ごす事に決めた。

まずは、ベンチに座りペットボトルのお茶を飲む。

お茶は買ったばかりなのに少し温くなっていた。

それだけ暑い夏だった。

そのお茶を一気に半分まで飲んだ。

その後、胸のポケットからラークと記したの箱を出し、煙草一本抜き取り安物ライターで火を付け、胸いっぱい煙を吸い込み鼻からぷはあっと出した。

そのままベンチに横たわり、仰向けの状態になった。

風が木々を揺らし、時々日差しが目に刺さった。

眩しくて目を瞑った。

時々開けて、煙草を吸い込んだ。

至福の一服を終えて持ち歩いている吸い殻入れに閉まった。

いくら日陰でも、7月は暑い。

ジワジワとベンチと密接している背中に汗をかいてくるのが分かった。

それでも太平は昼寝をすると決めて目を閉じた。

「おじさんなにしてるの？」

太平の頭上から、若い女の声が聞こえた。

太平は片目を開けた後、両目を開けた。

上から太平の顔を覗き込み、かなり間近に見知らぬ顔があった。

長い髪を高い位置で一つに束ねていたが、髪の手が太平の頬に触れていた。

両目でその見知らぬ顔を確認すると、それは色白の少女だった。

夏なのに透き通るような肌の白さが一番の印象だった。

目はくっきりとした二重瞼で、小作りの鼻。口元は小さく、どちらかと言えば美少女に入るだろう顔立ちだった。

片手に水色の、多分ソーダ味と思われるアイスクャンディーを持っていた。

滴り落ちそうになるとそのアイスクャンディーをペロリと舐めた。

「生きてんだ」

そう言い放し、またアイスクャンディーを舐めた。

「生きてるよ」

太平そう言って上体を起こした。

せっかくの昼寝を中断された上、おじさん呼ばわりされて、些か不機嫌だった。

少女は空いたベンチの空間に座り、アイスクャンディーを舐め続けた。

少女から出る赤い舌は妙に妖艶で、少女の幼さと相そぐわない様子だった。

「おじさんじゃないから」

太平はおじさん呼ばわりを初めてされ、それを認めたくなくて、少女に訂正させたかった。

「いくつ？」

「27」

「おじさんじゃん」

「君はいくつ？」

「15」

ひと回り違うとやっぱりおじさんか...

太平は否定するのも、訂正するのも諦めた。



少女はアイスクャンディーを最後まで食べきった。

「名前は？」

いきなり、少女に名前を聞かれた。

「太平」

特に意味はないが、何故か下の名前しか告げなかった。

「太平...次はそう呼んであげる」

少女は悪戯っぽく笑って、立ち去った。

たまたま、小さな公園で出会っただけなのに次なんてあるもんかと思った。

太平は胸のポケットからもう一本煙草を出して吸った。

背中が汗でびっしょりだった。

フライパンにオリーブオイルを入れて、ニンニクと鷹の爪を入れ、香りが出たところ、茹で立てパスタをささっと絡ませた。

冷蔵庫に残った野菜とベーコンのスープも丁度いい頃だった。

奈緒はテレビを見ながら、それが出来上がるのを待っていた。

奈緒はめったに料理する事はない。

作れない訳ではないが、太平の方が上手いので文句を言われるのを怖れているのか、料理をする事はなく朝のパンと目玉焼きぐらいしかやらない。

でも正直、仕事で散々料理した後、またキッチンに立つのは苦痛だった。

勿論、奈緒が片付けはしてくれるが、やはり作って欲しかった。

「出来たぞ」

「は～い」

奈緒は空腹だったのか、足取りが早く、食器棚から皿を出し給仕を待っていた。

太平はフライパンのパスタの半分を奈緒の皿に盛り付けてやった。

奈緒は自分の分の皿をダイニングテーブルに置き、太平の分の皿も両手で持って、盛り付けるのを待っていた。

それを終わると、スープは自分でカップに入れて、席についた。

太平の分のスープは入れてくれなかった。

太平は自分でカップに入れ、席についた。

「いただきます」

二人で声を揃えて食べ始めた。

奈緒は美味しいと喜んで食べていた。

「今日、おじさんって言われたよ」

「ふふ、全然おじさんじゃないじゃん」

奈緒は太平の二つ下で太平とは歳はそんなに離れていなかった。

「そうだろ」

「誰に言われたの？」

「通りすがりの、若い子」

「女の子？」

「うん」

「ふーん。それはショックだね」

そうか、俺は若い女の子に言われてショックだったのか。

太平は初めてその事に気がついた。

自分は恋愛対象にならないと否定された事に納得いかなかったのだ。

しかし、太平自身15歳は恋愛対象になるかという、それはないなと思った。



次の日の休憩時間も、あのベンチで寛ごうと太平は公園に向かった。

すると、昨日の色白美少女が既に座って水色のアイスクャンディーを食べていた。

横になれないなら、あのベンチは意味がないので、別の場所を探そうかと思い歩く向きを変えようとした時だった。



「太平、こっち」

少女が太平に気づき、手を振っていた。

太平は無視する訳にもいかず、のろのろと少女の元に向かった。

「太平、ここ空いてる」

少女はアイスクャンディーを舐めながら、ベンチの半分をどうぞという手付きで勧めた。

太平は言われた通り隣に座り、結露したペットボトルのお茶の蓋を開け、半分まで一気に飲んだ。

少女はその様子をアイスクャンディーを舐めながらジッと見ていた。

「暑いね」

「ああ、夏だからな」

そんな当たり前の会話を交わした。

太平はアイスクャンディーを食べ終わったらどいてくれるだろうと予測して、他のベンチを探すのを諦めた。

太平は煙草を吸おうと胸ポケットを弄り、箱とライターを出した。

その時少女が隣にいる事を思い出し、マナーとして吸ってもいいかという意味で、煙草の箱をチラッと見せて、ジェスチャーで聞いた。

「どうぞ」

少女は別に気にする様子もなく承諾した。

太平は煙草に火を付け、最初の一服を堪能した。

「あんた、名前は？」

太平はなんとなく無言が嫌だったので会話の為、少女の名前を聞いた。

「なつか」

太平は頭の中で色んな字を想像したが、見当付かなかった。

「どんな字を書く？」

「夏の香り」

夏香はそう答えた。

「今の季節の香りが...」

太平は独り言のように言った。

夏香はアイスクャンディーを食べ終え、立ち上がり「じゃあね」と告げて立ち去った。

太平は煙草を消し、すぐに夏香が居なくなった空席部分に横になった。

ベンチは夏香の温もりが残っていて背中が昨日より熱く感じた。

太平は目を閉じ思い切り、鼻から空気を吸い込んだ。

夏の香りが太平の体に染み込んだ。

太平は次の日の休憩時間もあのベンチに行った。

夏香はいるんじゃないかと内心どこかで期待していたが、夏香はいなかった。

いつものように、お茶を飲んでから一服しているところに夏香は現れた。

「おう。」

太平はもう会えないかとどこかで諦めていたから、少し声が明るくなっていた。

夏香は今日は紫色のグレープ味と思われるアイスクャンディーを舐めていた。

「今日は紫じゃん」

太平はそれを指摘すると、夏香は太平に少し顔を近づけて、べーッと舌を出した。

太平は少し驚いて顔を引いてしまった。

「紫になってた？」

「えっ？」

太平は夏香の目を見ていて、近過ぎた顔で、舌の色は記憶になかった。

夏香はもう一度同じ事をやった。

今度は太平も顔を引かず、夏香の舌に視線を集中させた。

夏香の舌は紫色になっていた。

「ああ、紫になってる」

太平がそう答えると、夏香は満足そうな顔をして太平の横に座った。

その時ベンチに手を置いていた太平の指が隣に置かれた夏香の手の指に触れた。



夏香はその指を避けようとしなかった。

太平も何となく引っ込みが付かず気づかぬふりをしてそのままにしていた。

もしかしたら、夏香は気づいてないのではないかと思うほど、平然とした顔で紫色のアイスクャンディーを舐めていた。

一つに束ねた髪のせいでうなじがくっきり見え、汗で少し濡れていた。

ただ会話もなく、夏香はアイスクャンディーを食べ終え、去って行った。

夏香が触れていた指が何時までも熱かった。

その日の晩、太平は奈緒を抱いた。

事が終わると、奈緒は

「太平、珍しいね」

と言った。

太平は奈緒と暮らし始めてもう二年が経つ。

正直、そういう行為は明らかに減っていた。

太平はぼんやりと天井を眺めてから目を瞑った。

太平と夏香は特に待ち合わせをしている訳ではないが、決まって毎日いつものベンチに座り、夏香がアイスクャンディーを食べ終わるまで、隣同士に座って過ごした。

太平が仕事の休みの日行かなかった日があった。

次の日、夏香に「昨日はどうした？」と聞かれたので、毎週火曜日は店の定休日ですと説明した。

ある日夏香はアイスクャンディーを食べ終えても立ち去ろうとしなかった。

「ねえ、処女としたことある？」

15歳の夏香が突拍子もない事を聞いてきたから、太平は平常心を保つのに必死で、一呼吸置いて気持ちを落ち着かせてから答えた。

「ねえよ」

「そう、じゃあ参考にならないね」

夏香はそう言って立ち去ろうとした。

「待てよ」

太平は呼び止めていた。

「何だよ、それ。気持ち悪いじゃん」

夏香はもう一度ベンチに座った。

少し間があったが、夏香は話し始めた。

「彼氏とさ...上手くいかなかったんだよね」

ああ、夏香って彼氏いるんだ。15歳でもやることはやるんだな。

太平は15歳の少女は15歳の女なんだと認識し直した。

「なんで？」

太平はとりあえず話を聞いてやるかと思った。

「...なんかこう...5分以上頑張ったけど、上手く入らなくて...諦めた」

太平は驚いた。入れんのに5分以上かかるのか!?

太平には経験なかった事だ。

こりゃ俺の経験外だから無理だわと思ったけど、大人として悔しいからもう少し話を聞いてみようかと思った。

「彼氏も初めてか？」

「多分…」

太平は自分の初体験の事を思い出そうとした。

確か相手は一つ上の先輩で、経験ありの人だったから割とスムーズだったような…

初めて同士だと苦労するんだな。

太平は呑気に思ったが、夏香にとっては重大な問題だった。

「大きさとか関係あるのかな？」

太平は残りのペットボトルのお茶を口に含んだ時だったので、思い切り吹いてしまった。

太平は慌てて、口を拭い、落ち着いた声を装い、

「関係ねえだろ」

と答えた。

「そっか...じゃあ私のせいかな...」

夏香は少ししょんぼりした横顔だった。

「まあ、焦んなよ。一生できないって事はないと思うぜ」

「...うん」

太平はもう少しマシな答えを言ってあげたかったが、何の力にもなってやれず情けない気分になった。



その日の晩、奈緒とテレビを見ていたが、太平は夏香の話が頭から離れなくて、テレビの内容に集中出来ないでいた。

「なあ、初めてん時ってどうだった？」

太平は無意識に奈緒に聞いていた。

奈緒は物凄い驚いた顔をして、太平を見た。

「太平、どうしたの？初めてって何？何のこと？」

奈緒に言われて、ハッとして、今自分が何を言ったのか自覚した。

しかし、聞いてしまった以上聞いてみる価値もあるんじゃないかと思い、話を振ってみた。

「いや、なんとなくさ。奈緒は初めての時どうだったかなあって思っただけ」

「...ええっ？太平おかしいんじゃない？それ私に聞くの？」

奈緒は答えてくれなさそうだった。

「だからあ、なんとなく思っただけだからもういいよ」

そう言って、太平は諦めようとした。

すると奈緒は、ボソッと話し出した。

「痛かったよ。痛くてたまんなかった。もう二度としたくないって思ったよ。血も出たし…」

奈緒はちゃんと答えてくれた。太平は更に聞いてみる事にした。

「なかなか入らなかった？」

「…うん。凄い時間かかった気がする。それが今じゃねえ…」

奈緒はケタケタと笑い出した。

太平は奈緒の屈託の笑い顔につられて、太平も笑った。

「よし、試すか」

太平はそう言って奈緒の傍に近づき、押し倒した。

次の日は火曜日で太平は定休日だった。

奈緒は服飾関係の販売員で、休みは不定期で付き合い始めの頃は、太平に合わせて休みを取ってくれていたが、最近はその我がままも言えないと特別な用がない限り同じ休みを取らなかった。

太平は昼過ぎまでベッドの中で過ごし、ようやく腹が減ってきてリビングに出てきた。

リビングのエアコンは付いてなかったので蒸し暑く、一気に汗が体中から噴き出した。

太平は慌ててエアコンを入れ、バスルームに向かった。

かなり温めのシャワーで汗を流し、全身を洗いバスルームから出ると、エアコンが効いたリビングは天国のようだった。

冷たい水を飲もうかと冷蔵庫を開けると空腹だった事を思い出した。

冷蔵庫には食材が随分乏しくなっていた。

太平は水のペットボトルを出しながら買い出しにでも行こうかと考えた。

水をグラスへ注ぎ、一杯飲みきると、水のペットボトルを戻し、出掛ける支度をした。

天国のようなリビングは名残惜しいが、エアコンのスイッチをオフにして部屋を出た。

近くのスーパーでかなりのまとめ買いをして、自転車に積んでいた時の事だった。

前から夏香と夏香と同じ年くらいの男が手を繋いで歩いて来た。

夏香は太平に気がつき目が合った。

太平は話し掛けようとしたが、夏香は目を逸らし、無言で太平の前を過ぎ去って行った。

何だよ。あの態度...彼氏と一緒にだと俺はシカトかよ。

太平は無性に腹立たしくなった。

自宅に帰ると、リビングはまた蒸し風呂のように暑くなっていた。

太平はエアコンを急いで入れ、買ってきた食材を冷蔵庫に入れた。

スーパーで買ってきた鮭弁当を食べて、ようやく天国が復活したリビングで横になりうたた寝を始めた。



目が覚めるともう午後六時を回っていた。

飯でも作るか。

太平は買ってきたばかりの食材で珍しく中華料理を作った。

太平は主に店では洋食屋だったので、洋風なモノが得意だったが、この日は中華料理の気分だった。

酢豚と春巻きと麻婆茄子を作った。

作り終えた頃、奈緒が帰宅した。

「ただいまあ！何かいい匂い！」

「おかえり。今日は中華だ」

奈緒はパタパタとキッチンに入り、出来上がった料理を覗いた。

「凄い！太平美味しそう」

奈緒は目を輝かせて喜んでいた。

「手洗ってこい。食うぞ」

「うん」

奈緒は洗面所に行き手洗いをして食卓に着いた。

太平も奈緒も満腹になり満足していた。

「休みの日は太平、腕、奮ってくれるから嬉しい」

奈緒はニッコリ笑って、片付けを始めた。

太平はリビングで横になった。

奈緒が皿を洗う水の音がした。

夏香はその日、珍しくアイスクャンディーではなくバニラのソフトクリームを手に握りしめていた。

「珍しいな。ソフトクリームじゃんか」

太平はそう言いながら、煙草をふかしていた。

「出来た」

夏香はソフトクリームを舐めながらそう言った。

太平は何の事が直ぐに理解出来た。

「良かったじゃん」

そう言ったが、夏香の返事はなくソフトクリームを舐め続けていた。

太平が煙草を消し吸い殻を終うと、夏香の膝にソフトクリームがポタッと垂れる瞬間を見た。

太平は反射的その膝を舐めた。

一瞬夏香の動きが止まった。

太平は顔を夏香に向けるとソフトクリーム越しに夏香は太平を見下ろしながら、また舐め出した。

夏香の指には溶け出したソフトクリームがダラダラと垂れていた。

太平は少し頭を上げソフトクリームを握っている夏香の指を舐め始めた。

溶けたソフトクリームは夏香の体温で生暖かった。

夏香は太平から目を逸らさず、その様子を楽しむかのようにわざと垂れるよう、周りは舐めず上ばかり舐めた。

太平もソフトクリームを挟んで夏香を見つめながら、垂れているソフトクリームを掬うように舐め続けた。

太平が少し、コーンとクリームの間を舐めると舌の先端に温かいものを一瞬感じた。

夏香の舌は白いクリームを乗せていたが、先端だけが赤く舌の色が出ていた。

太平は我に帰り、ソフトクリームから顔を離し、ベンチに座り直し残りのペットボトルのお茶を飲み干した。

口の中の甘ったるさが、スッキリと取り除かれた。

夏香は立ち上がり、近くのゴミ箱に残りのソフトクリームを捨て、そのまま離れて行った。

唇がまだ甘く、ベトつきが残っていた。



その日太平が仕事から帰るのが少し遅くなってしまった。

すると珍しく奈緒がキッチンに居た。

「そうめん茹でてる。唐揚げも作ったよ」

「珍しいな。奈緒が作るなんて」

「たまにはね」

そう言いながら、火を止め、そうめんの入った鍋を箆に勢いよく流した。

太平は冷蔵庫を覗いてサラダになりそうな野菜を取り出し、簡単なサラダを作った。

二人で揃ってそれらを食べた。

「唐揚げうめえじゃん」

太平が褒めると奈緒は太平に向かってピースした。

食後、太平はリビングで横になりながら、洗い物をしている奈緒の後ろ姿を何気に眺めていた。

太平は何故か昼間の夏香が頭によぎった。それを思い出しては何度も消した。

太平は突然立ち上がり、奈緒を後ろから抱きしめ、首筋に舌を這わせた。

「...あ」

奈緒は不意打ちの太平の行動に少し照れて、赤くなっていた。

太平の手は奈緒のスカートの裾をたくし上げ、中に忍び込んでいった。

「...っ太平？」

「珍しい奈緒のエプロン姿に萌えた...」

「洗えないよ」

「後ですればいい」

太平はそのままキッチンで奈緒を抱いた。

「太平、最近変だよ。何かあった？」

夜ベッドに入ると奈緒がボソツと言った。

「何もねえよ」

「ふうん。ならいいけど…」

それきり奈緒は喋らず寝息をたてた。

太平は奈緒の寝息を聞きながら思った。

もうあの公園に行くのは止めようと・・・

翌日の休憩時間は厨房の裏口で一服した。

空は低く黒くなってきて今にも雨が降りそうだった。

一服終えた頃、遠くから雷が鳴り出した。

「一雨くるな...」

太平が空を見上げると、案の定ポツポツと降り出した。

太平は慌てて厨房に戻った。

雨は激しく、屋根を打ちつける音がした。

雷もなかなか鳴り止まなかった。

太平は夏香の事が気になりだした。

まさか、雨の日にアイスは食わねえだろう。

そうは思うが、雨の中あのベンチに夏香が座っているような気がしてしょうがない。

居ても立ってもいられず、太平は厨房の扉の側にあったビニール傘を掴み、とうとう裏口から外へ出た。

太平はパシャパシャと足元を濡らしながら公園に足早に向かった。

公園に入り、いつもの隅のベンチに目をやると、夏香は傘も差さずそこにいた。

「あの馬鹿…」

太平は急いで夏香の元へ走った。

「雨ん中なにやってんだよっ！」

「太平、遅い」

夏香は頭からずぶ濡れで、まるで服のままシャワーを浴びたぐらい濡れていた。

太平が傘を差し出すと、雲の切れ間から光が差し込み、雨は大人しくなり、あっという間に止んだ。

「太平、まじで遅過ぎ…」

そう言って夏香は笑った。

明るい日差しが夏香を照らし、白い肌が一層透き通って見えた。

太平は傘を畳むと、夏香は束ねていた髪を解き、犬のようにぷるぷると左右に首を振った。

水しぶきが太平にかかった。



太平は腰にあったタオルを取り出し、夏香の髪を拭いてやった。

すると夏香は立ち上がり、後ろを向いた。

太平はゆっくり丁寧に拭いてやると、夏香の白いうなじに目を奪われ手が止まった。

夏香はゆっくり振り向いた。

夏香の濡れた白いシャツは夏香の肌にぴったりと張り付き、下着がクッキリと浮かび上がり、膨らみもハッキリ分かった。

太平は夏香の腕を掴み、一目の付かない木の影に連れて行った。

そして、向き合い夏香の白いシャツのボタンをひとつひとつ外し、それを脱がせた。

夏香はジッと太平を見つめ、目を反らさなかった。

夏香はブラ一枚になり真っ白肌は幾分、雨で潤っていた。

太平はブラの肩紐に指を掛けようとした時、何故かピースした奈緒が頭によぎった。

太平は自分の着ていたTシャツを脱いだ。

そして、夏香の頭に被せた。

「それ、やるから帰れ。もう二度とここに来んな」

太平はベンチに置いた夏香を拭いたタオルを掴み、首にかけ畳んだビニール傘の真ん中を掴み、歩き出した。

『意気地ナシ』

そう誰が言ったような気がした。

あれから太平は公園には行っていない。

夏香も学校が始まっている頃だろう。

仕事を終えて帰宅すると、奈緒はキッチンで夕食の支度をしていた。

最近奈緒はあれ以来料理する事の楽しみを覚えたのか、キッチンに立つ事が多くなった。

奈緒の料理に太平は一度も意見を言わなかった。

時々、火の通り過ぎや塩の使い過ぎもあったが、文句を言わず平らげた。

「ただいま」

「おかえり。今日はお芋煮てみたの」

「楽しみだ」

そう言って、太平は後ろからそっと奈緒の耳元に唇を寄せた。

奈緒は小さく微笑み、鍋の中の芋の様子を箸でつついていた。

リビングがエアコンで冷え冷えしていた。

太平は少し身震いして、エアコンを止めた。

窓を開けると、少し心地良い風と共に秋の香りが鼻を掠めた。

もう夏の香りは思い出せなかった。

ふと、夏香を思い出そうとしたが、夏香の顔がぼんやりとして思い出せない。

もしかしたら夏香という人物は本当は存在せず、昼寝の際の夢だったのではないかとさえ思えてきた。

「なあ、そろそろ籍入れるか」

奈緒は太平の声に振り向いたが、内容まで聞こえてなかったようで首を少し傾けた。

「何？なんか言った？」

「腹減った」

「もう、出来るよ」

太平はダイニングテーブルに向かった。  
窓からの秋風が白いレースのカーテンを揺らしていた。

END

2012.6.17作成

## 夏の香

<http://p.booklog.jp/book/85719>

著者：キミイ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kimiynoheya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85719>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85719>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ